

## 人権コラム (第 31 回) 1 月 人や社会を信じて出かけた



町で困っている障がい者の方を見かけたが、どう接するか分からない。そんな時あなたならどうしますか？

現在、高齢者の方や障がい者の方、外国から来られた方、ベビーカー利用の方・・・など多様な人たちを町で見かけます。全人口の 28% が高齢者、7% が障がい者、3 歳未満は 2% と言われています。つまり日本に暮らす 3 人に 1 人は外出の際などに不安を感じていると言えます。以前と比べたら駅や公共施設は改善され、案内表示板や歩道の充実、優先座席や点字ブロックなど、やさしい町づくりが進んできていると思いますが、すべての人にとってまだ暮らしやすいとは言えません。

「多くの人たちは障がい者を気にかけているが、どうしたらいいのかわからないのでは」と話すのは、「日本ユニバーサルマナー協会」の代表である車いす利用者の垣内さんです。垣内さんは「弱者を助けるという発想ではなく、自分と違う誰かと接する際のマナーとして広まってほしい」との思いを込め、2013 年から「ユニバーサルマナー検定」を始めたところ、新聞に掲載されていました。2016 年に「障害者差別解消法」が施行されたのがきっかけで認知度が急に上がり 3 級を取得された方が約 10 万人に達したそうです。

自分とは違う誰かのことを思いやり、適切な理解の下、行動することで押し付けではなく「選択の自由」をつくるような「こころづかい」が生まれると言われます。例えば、障がい者の方が困っていたら、「何かお手伝いできることはありますか？」こう声をかければ相手も答えやすいそうです。(3 級で学ぶ大事な言葉)

施設や設備をすぐに変える事が出来なくても、私たち一人ひとりの「こころづかい」が困っている方の手助けになると言えます。

一方、ある事故で障がい者になられた方の思いを綴った手記の一部に目が留まりました。

『健康で思うように動けるといのは嬉しいことですが、しばしば「弱さ」に鈍感になってしまう。一方で弱さをもつと、気後れや遠慮をしてしまいがちになる。私は、自分の経験から「早めに、率直に具体的に、助けを求めるといいう方法を選ぶ。何より自分が安全かつ楽になり「また出かけよう」といいう気持ちになるためにも。「自分の身は自分で守らねば！」と身構えながら外出するのは、とっでもしんどい。「困ったら誰かが助けてくれる」と信じて出かけた。』という思いです。

この社会にともに生きるものとして、お互いを知りあっていく。そこに上下関係はない。そんな気持ちを忘れないでいたいものです。

